

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第478号 2022年1月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

待つ

高丸もと子

人との出会いがそうであるように、作品にも必然と感じる出会いがある。それは通勤帰りの満員電車の中のこと。前にいる人の読んでいるページが丁度私の目の位置にあり肩越しから私も読んでいた。それは読者の投稿欄で「タクシーの運転手さん」とあった。

幼い頃、顔に火傷を負ったその女性は、高校生になり好きな人ができた。顔面の傷を気にして自殺を図ろうとする。厳寒の夜半、家を抜け出しタクシーに乗る。行先と彼女の様子から運転手は察する。そして自分にも娘がいる、親というものはいつでも心配していると話す。東尋坊に着いた時「気が落ち着いたら戻っておいで。おっちゃんはずっとここで待っている

から」と言っただアを開ける。夜が白々と明ける頃ふと、運転手の言葉を思い出す。確かめるために引き返すと、ぼうつとした人影が近づいてきた。運転手は長い間、外で彼女が戻ってくるのを待っていた。何も言わずドアを開け温かい車内に入れてくれたのだ。家の前まで送ると、いつでも電話をと言いつつ番号を書いた紙を手渡す。その後、彼女に好きな人ができ、結婚式に運転手さんを招待したい。という話で終わっていた。

私はこの話を学級の子ども達に、保護者に、教え子にと紹介してきた。どの様な時でも、待っていてくれる人がいるというのは、どんなにうれしいことだろう。

この話から私は、親にしかでき

ないこと、他人にしかできないこと、そして教師にしか、友達にしかできないことがあると強く思った。もし、親ならこの場合、必死で止め、傷を負わした自分を責め続けることだろう。他人だから放すことができた。運転手の言葉には祈りと賭けがあった。しかし、放した後はいつでも走り寄れる距離で待っていたに違いない。自分の立ち位置、距離、待ち方は、そうせずにはおれない無償の愛だった。日頃から信頼関係のある教師や友達の間では尚更のこと。必ず救えると思うのだ。

私たちは待つ行為の中で生かされている。湯が沸くのを待ち、冷めるのを待つて飲むというその一連の中にも「待つ」が溶け込んでいる。命あるものはいずれ皆、待たれていく自然の懐に還っていく。「冬来たりなば春遠からじ」にあるように人は待つ向こうに希望を描いて生きてきた。時間そのものが「待つ」であり「生きていく」ことなのだ。私は初めて気づかされたのだ。

約束
 待つのもいいけれど
 待ってもらうのも
 うれしい

わたしが
 絶対生きてるとい
 う証拠だから

『今日からはじまる』

大日本図書

(国語教育大阪恵雨会代表)

さざなみ

▼4年の教材「ごんぎつね」は、全国各地で工夫した授業が展開されています。令和3年の年末に届けていただいた「新美南吉作品紹介400」(宝塚市末成小学校4年1組)は、学習内容・紹介文・お話の絵などで編集した立派な装丁の冊子です。手間と時間をかけて指導されたのは学級担任の後藤勝徳先生▼「読書の楽しさを味わう」を目標に、新美南吉のお話を子ども達と読み合い、読んだお話の中から一つを選び紹介文を書くという学習の成果をまとめた手作業のもの。そこには、子ども達が読んだ新美南吉作品のタイトルの一覧表を掲載しそれぞれの作品を読んだ人数を示しています。全員が読んでいる本は「あめ玉」や「手袋を買いに」等12作品です。一人しか読んでいない作品を含めると118作品です▼一人が「作品の「あらすじ・楽しみ・おすすめ」の視点で文を書き、図工の時間に描いたお話の絵が加わり豪華なページに仕上げられます。文章は、各自で端末を活用した活字と手書きを選んで書いてあるので読みやすくなっています。「新美南吉記念館」に置いてもらうというの目的の一つなので仕上げも丁寧で美しい冊子です。▼学習の楽しさから、半田市へ行きたいという気持ち溢れ、冬休みに家族で「新美南吉記念館」を訪ねるとい子にクラスを代表して贈呈する役を任されたそうです。(吉永幸司)

国語力の上げ方
川端 由起

「学びの確認テスト」を年末に行いました。これは6年生で受ける「全国学力・学習状況調査」(全国学力テスト)の前哨戦と言えるべきテストです。主に論説文、会話文から成り立っていました。私立中学や、私立高校の入試で問われる論説文と小説文の組み合わせではありません。

結果は芳しくなく、2学期に入ってから、行事ごとに作文を書かせ、ディベートを行ってきたにもかかわらず、結果が出せないことに悔しさと徒労感が一気にわいてきました。

学校教育と少し離れたところで、今回は話をさせていたと思います。息子の関係で、「国語力を上げる」の関係本を昨年度色々読ませていただきました。それによれば、まず漢字を徹底的に覚える。そして、語句、文法論説文・小説文の読解を並行してやるべきだとあります。

国語力を上げるためには、この漢字、語句、文法を学習しながら、並行して、論説文や小説文の学習をしていかなければならないと本には書いてありました。

私は学力テストの問題と、児童の答案用紙を思い出し、何の力が足りないから、答案が書けないのかを必死で考えました。答えは、圧倒的な語彙力不足と、文章の要点がわからないので、問いに対する答えが見つけれないことが原因

因だと思いました。

それを克服するにはどうするか。国語は毎日授業がありますが、扱う主な作品は年間で10作品ぐらいです。教科書は発達段階に伴いそれぞれ学習するべきことが決まっています。その作品を学習している時は、「作者の言いたいことを要約できる力」「主人公の心の変化を読みとる力」をつけた気になつていました。何故なら、説明文の作品の要約の文章が短時間で上手に書けるようになったからです。ポイントを押さえ、自分の力で児童は書けるようになってきたのです。小説に関しては、ノートに「主人公は、何をきっかけに気持ちが変わったのか」をキーワードを押さえて自分の言葉で書けるようになったのです。しかし、学力テストの壁はあつたので

学力テストのための勉強は、しなくありません。しかし、児童の学力は思ったより低く危機感を覚えました。私は何をしなければならぬのか。冬休み、自問自答し、とりあえず毎日言葉や文章に触れることが大事だと思いました。国語の授業の初めに、ある言葉を使って文章を作る。2日(3日)に1回は新聞の天声人語を10分で要約させる。等。とにかく毎日行わなければ国語力は伸びないと真摯に思いました。もちろん学年や学校全体との兼ね合いもあるので、全て実施できるかどうかわかりません。できる限り行い、子どもたちの将来のために力を注いでいきたいと思えます。

(草津市立志津小学校)

詩の世界に浸る

西條 陽之

「生活の中で詩を楽しもう」(光村5年)では、教科書で取り上げられている詩やこれまでに学習した詩を楽しむ方法を考えることが活動として設定されている。子どもたちはこれまで、詩を暗唱したり、自分でつくったりする経験を積んできているが、既存の詩を生活の中で楽しめるようにするには、詩の面白さや味わい深さ、世界の広がりを実感する必要があると考えた。

詩との出会いの工夫として、教科書冒頭のジュールルナルの「蛇」、まどみちおの「するめ」それぞれの題名をふせて提示した。「蛇」については「長すぎる」と言ったらコロナかな。「夏休み？」などユーモアのある意見が出た。題名を知り、自然と「なるほど。」という声漏れ聞こえて

きた。作者がフランスの詩人であることを伝えると、タブレットを使ってフランス語に訳し直す子もいた。「するめ」については正解は出なかったものの、詩の言葉からヒントを得て、矢印の形、海に關係するものなど、多様な意見が出た。ただのクイズではなく、「どうしてそう思ったの？」とそれぞれの考えを拾い上げることが、詩の味わい方を示すことができた。比喩や対比といった表現技法に着目して面白さを解説する子どもも多く、五年生までの学びが積み上がっている事、そして、最高学年へと向かうにふさわしい成長した姿を垣間見ることができた。

教科書の中のお気に入りの詩とその理由を発表したあと、図書室に行き詩集を借りることにした。ありがたいことに本校は詩集の本が充実している。この単元はしばらくお休みにして、朝の読書や空き時間にたっぷり詩の世界を散策した後で、自分に合った楽しみ方を見出してもらおうと思う。

(大津市立小野小学校)

声で表現する
北川 雅士

詩を朗読して紹介する学習に取り組んだ。

導入では朗読について確認し、みんなで気持ちを込めて読む練習を行った。これは以前に群読指導に来ていただいたラジオDJの方から教えてもらった方法で、ひらがな一字を声に出して感情表現する方法だ。今回は「あ」で5パターンの感情を表現してみた。

- ①・・・びっくりしたときの「あ」
- ②・・・納得したときの「あ」
- ③・・・何かを見つけたときの「あ」
- ④・・・怒っているときの「あ」
- ⑤・・・突然の出来事に感激したときの「あ」

これをペアで順番に声に出し、声に気持ちを込めるというのとはどのようなことなのかを体感した。そのあとで教科書に掲載されている詩、八木重吉の「ぼくぼく」をノートに視写して、それぞれが詩について自分なりに解釈したことなど、文章全体に対する思いや考えを書いて交流した。「なぜこの子はまりをついているのだろう」「まりってぼくぼく音がするのかな」「にがいにがいて2回繰り返しているから余程嫌なことがあ

ったのかな」「何が花に見えるんだろう」など様々な視点から自分の考えを話したり、議論する様子が見られた。次に詩に対する自分の考えを「声」で表現するために、読むスピードや、声の大きさ、間の取り方などを視写した詩の横に書いて小グループで詩の朗読を交流した。

「言葉をとどのように読んでいくのかをしっかりと考えて朗読することができました。読み方を考えるというのはまだまだ難しいです。」「朗読の交流をして、演劇をしているみたいだと思った。詩の朗読は初めてだったけど、読み方のちがいが楽しかったです。」

「ぼくぼく」という部分を意識して同じスピードで読むことができませんでした。なかなか自分のイメージ通りに読めないのが難しいと思いました。」「朗読してみて思ったことは詩に感情をいれることで、その詩の景色が頭の中で想像できたのでいいなと思いました。」

新型コロナウイルスの感染が拡大して以降、声を出して表現する活動は制限される場面も多い。しかし、声に出して表現するよさや面白さを、このような学習を通して学んでいくとともに、今後は声に出すだけでなく「伝える」ということを意識した指導にも取り組んでいきたいと思う。

(彦根市立城南小学校)

『いつもやっている
ふえおに』だ！
川端 大介

3学期が始まり、教室に子どもたちの元気な声に戻ってきた。その元気な声が「三学期もみんながんばろう！」と言っているかのようない感じが感じられた。

国語科では、音読にこだわって指導をしてきた。文章の内容理解や記憶の定着、授業の雰囲気や向きにする、自分の読みの再認識等、音読の効果は計り知れない。二年生三学期初めの物語教材『おにごっこ』を初めてクラスで読んだ後の出来事を紹介する。

一時間目は、教師が範読しその後、子どもたちが追い読みをする。言葉の確認を行った後、一人読み、ペア読みと変化をつけた音読活動を行った。一人読みが終わった時の事である。

「先生、このお話の中にも僕たちがやっている『ふえおに』の説明が書かれているよ！」

とある児童が言った。それに続くように、「分かる分かる。ペーJの△行目だよね。」と子どもが発言する。

授業の計画は立てていたのだが、「ぼくたちがやっている『ふえおに』のルールと少し違いがある。」の発言から、説明文とクラス体験の差異から授業を組み立てるようにした。

単元の学習課題を「2の1のふえおにをさらにおもしろくするための工夫を見つけてよう」とした。

私は、休み時間を子どもたちと遊ぶようにしている。遊びを通して子どもたちと心から繋がることで学習指導がより良いものになると考えているからだ。

その遊びで『ふえおに』が大人気なのである。「おにが交代せずに、つかまった人が、みんなおにになっておいかける。」最終的には、全員がおにになる。

4月からクラスで取り組んできた『ふえおに』が国語の教材文の中に盛り込まれていることに対して、子どもたちはとても喜んでいっているように感じた。体験を通して学びは、身体の中にストンと落ちていくのが手に取るように分かった。

今は、まだ物語教材の指導途中である。つくづく感じるのは「体験」を通して学びがこれほどまでに、学習の勢いを加速させるのかということである。

自分の持っている知識によって「知ってる！」と自信を持って発言する子どもたちが輝いて見える。これから、学習を進める上でも、「いつもやっている○○」と子どもたちから出るような学習計画を立てていきたいと思った。

物語教材の学習後の『ふえおに』が楽しみで仕方がない。本文の内容や、遊びが書かれている図書から子どもたちが今よりもレベルアップさせるためにどんなルールを付け加えるのだろうか。少し、期待しているのは「僕たちの『ふえおに』はもう書かれていることは工夫しつくしているよ！」という子どもたちの声であるかもしれない。

(守山市立 立入が丘小学校)

子どもたちの
人権標語を活かす
人権教育推進協議会(新旭)
伊庭 郁夫

本年度は、高島市人権教育推進研究会新旭地区支部長を担当させて頂いていただくことになった。「人権教育を楽しく身近に」を心がけた。コロナ禍、主な取り組みは二点であった。

一点目は、新旭地区人権研修会の実施である。講師に人権標語をされている「水平亭平助」さん(本名安田晴彦さん)をお招きした。お名前は「水平社」からとられたとお聞きし熱い思いを感じた。アンケートの中から少し紹介する。

- ・人権標語を初めて聞きました、とても聞きやすく楽しく聞くことができた。身近な話を交えて聞けて、心にストンと落ちた。
- ・長浜市の富田人形を支える地域のお話はとても良かった。自分の反省材料として心に響いた。
- ・人権の基本を標語で笑いもあり楽しかった。研修内容を友人や知人にも話して一人でも多く広げたい。

講師をしてくださった「水平亭平助さん」には、この日の為にネタを練り随分練習してくださいましたのだと感じた。事務局にも大変お世話になった。

二点目は、人権啓発作品の募集と優秀作品の決定である。

昨年度は、標語の部二六五八点、イラストの部三点の応募があり、その中から十七点の優秀作品が決定された。高島市内の小学校一年生から中学三年生の子もたちから多くの作品が応募された。優秀作品については、高島市のホームページや人権啓発物品に活用されている。

私は、職場で利用者の研修を担当し「人権研修」は、年に二度実施している。そのうちの一回を「人権啓発優秀作品」の活用にあてたいと考えた。

優秀作品十七点の中から十点を選び、各標語についてキーワードを隠しておいて利用者に考えてもらう。模造紙に人権標語を書き、キーワードを丸く切り抜いた黒画用紙で隠す。キーワードの文字数に応じて丸く切り抜いた黒画用紙を貼り付ける。

その中から実際に選んだ優秀作品の提示と「キーワード」や選んだ視点を四点紹介する。

1 ふわふわことばみんながつかうと〇〇〇〇えがお(一年生)

「にこにこ」学校現場ではよく心がほかほかするふわふわ言葉を考えてことを思い出す。「ありがとう」「ごめんね」「すいね」「よくがんばったね」等のふわふわ言葉によって、がんばっているときやつらい時に励まされる。利用者からは「あかるい」ではないかと

の考えが出た。もちろんそれも四字ですてきな意見であった。

2 よいところ 〇〇〇めいじん になりたいな (二年生)

「さがす」「美しいものを美しい」と思えるあなたの心が美しいという相田みつをさんの言葉を連想する。人権で大切なことは、優しさを見つけられる心のように感じる。

3 いらぬいよ 心の〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 (六年生)

「ソーシャルディスタンス」コロナ禍で、よく聞く言葉になった。標語も世相を反映している。(社会的距離)のことである。心に距離は不要である。この「ソーシャル・ディスタンス」は社会的孤立を生む可能性があるとして、世界保健機関では「フィジカル・ディスタンス」(身体的・物理的距離)に言い換えるよう推奨しているそうである。

4 認めよう 十人〇〇〇の素敵な個性 (中学一年生)

「十色」本年度、私の所属する社会福祉法人「虹の会」では、新しいグループホームが完成し十人が入所することからその名前が公募され決まったのが、「という」である。

昨年度に引き続き、本年度も多くの人権啓発標語が集まった。(社会福祉法人虹の会アイリス)

編集後記

▼十二月例会(四十七回)は、「第3回近江の子ども俳句教室」(投句部門)の審査会と作品研究。今回は、秋と冬の作品を募集した。三五四〇句の作品から入賞入選を選びました。紅葉や栗、さつまいも等を見ながら、しっかりと観察し、十七文字にしている見事な作品が多く選にも力が入りました。

▼コロナの影響で遊びを制限された気持ちを吹き飛ばすように、どろんどろんとした気分になることがありました。サッカーや野球の試合に打ち込んだ爽快な気持ちの半面、敗れた時の悔しさを表現した作品に応援したいと思うこともありました。彼岸花やすすき、落葉や赤とんぼみかんの収穫など、季節を生かした作品から、暮しや地域の環境を作品の奥にある思いを想像しました。審査の方法は互選です。高名句を得たのは、「弟がグーでもみじにまけていた」(小6年)「どんぐりをふくろいっぱい ひろつたひー」(幼)「おつきさまちきゅうのかげに食べられる」(小3年)「カレンダー残り一枚冬近し」(小6年)等でした。

▼子ども俳句のよさは、言葉への関心を高めたり語彙を増やしたりするところだと思います。リズムのある言葉で情景や場面を表現できるところがポイントです。作品を前に、俳句への思いを語り合いました。

▼作品を応募してくださった皆様、応援をしてくださった先生や保護者の皆様、ありがとうございました。

▼巻頭には、高丸もと子先生の玉稿を頂きました。深謝。(吉永幸司)